

青空教室の結果について

1 実施期間

令和7年（2025年）9月13日（土）～9月15日（月・祝）2泊3日

2 実施までの経過

- 令和7年7月12日（土） 参加者とその保護者に向けた説明会
- 令和7年8月23日（金） 参加者と学生ボランティアの参加者交流会

3 実施場所

国立若狭湾青少年自然の家（福井県小浜市）

4 結 果

(1) 参加児童生徒数

- 申込み24名、キャンセル4名
- 「ほっと東海」入級生18名、入級していない児童生徒2名

	小4	小5	小6	中1	中2	中3	総計
男	1	2				2	5
女	1		4	1	3	6	15
計	2	2	4	1	3	8	20

(2) 活動内容（主な内容）

- 9月13日（土） 8：30 東海市役所集合、出発の会
 11：30 縄文ロマンパーク、海浜自然センター
 14：00 国立若狭湾青少年自然の家着
 15：40 活動① ボランティアとの交流
 19：00 活動② スウェーデントーチ
- 9月14日（日） 9：00 活動③ 山の散策（雨のため中止）
 →スルーリングラリーに変更
 13：30 活動④ シーカヤック、磯観察、水泳
 19：00 活動⑤ ボランティアへの感謝の手紙作成
 ボランティアとの交流
- 9月15日（月・祝） 9：00 活動⑥ カッター船活動
 13：40 国立若狭湾青少年自然の家発
 16：30 東海市役所着、解散

(3) 参加した児童生徒の様子

- 1日目は、まず縄文ロマンパークで昼食をとってから福井県海浜自然センターを見学するなど、福井県の施設を訪問した。その後、国立若狭湾青少年自然の家に予定通り到着し、児童生徒と大学生ボランティアとペアづくりをした後、

アイスブレイクを行い、緊張した心をほぐすことができた。大学生ボランティアと一緒に過ごすうちに会話も進み、少しずつ打ち解けていき、日が沈むまで海辺で過ごす姿も見られた。夜は、スウェーデントーチの灯りを眺めながら、波の音を聴いたり、星空を眺めたり、ゆっくりとした時間を感じることができた。

- 2日目の午前は、山へ散策にでかける予定だったが雨が降っていたため、室内でのスルーリングラリーに活動を変更した。児童生徒と大学生ボランティアの混合チームを6チーム作成し、施設内に9カ所設置した輪投げコースを回り、得点を競い合った。スタッフも児童生徒が楽しめるようにコースごとにルールを工夫したり、失敗しても大学生ボランティアが優しく励ましてくれたりしたため、全てのコースを楽しく、スムーズに回ることができた。

午後には天候が回復し、海の活動を行うことができた。今年度から国立若狭湾青少年自然の家スタッフのサポートがなくなり、昨年度まで実施していた活動を大幅に削減した。海の活動であるため、児童生徒の安全面を第一に考えるとともに、活発に活動することが難しい児童生徒も多いことから、安心して海の活動に参加できるよう配慮した。そのため、当初は磯観察だけを希望していた児童生徒も、水泳活動に挑戦してみたいという思いをもつことができ、海に入れた喜びと、人と関わる楽しさを感じることができた様子だった。大学生ボランティアと楽しみながら活動する姿が見られた。夜には、大学生ボランティアへ感謝の思いを込めて、手紙を書くことができた。

- 3日目の朝は、カッター船活動の開始の時には日差しが戻り、児童生徒と大学生ボランティアと力を合わせて大きな船を漕ぐことができた。カッター船活動を希望しなかった児童生徒も陸で見送りや出迎えをしっかりと行い、仲間のがんばる姿を目にして、「お疲れさまでした」「ありがとう」と声を掛ける姿があった。

おわりのつどいでは、前夜に書いた手紙をお世話になった大学生ボランティアに手渡し、感謝の気持ちを伝えた。また、大学生ボランティアもサプライズで手紙を用意しており、受け取った児童生徒からは笑顔と涙があふれていた。

予定通りに、若狭湾青少年自然の家を出発し、16時半頃に市役所に帰着した。児童生徒に疲れは見たものの、さまざまな活動に取り組めたという達成感でいっぱいの充実した顔が見られた。迎えに来てくださった保護者の方々も安堵した表情で児童生徒を迎えてくださった。

5 評価

- 7月12日（土）の参加者説明会では、申し込みを迷われている児童生徒や保護者が多くみられたが、若狭湾での活動が分かるように、画像を用いて説明を行ったため、説明会后に申し込みをした児童生徒がいた。
- 作年度より若狭湾からの学生ボランティアの派遣がなくなったため、例年、募集を行っている星城大学、大同大学、日本福祉大学に加え、至学館大学にも募集依頼を行った。大学生ボランティアは、15名（星城大学8名・日本福祉大学7名）の参加があり、児童生徒に寄り添いながら活動をサポートいただいた。
- 参加した児童生徒に成長や変化が見られた。特にボランティアとの交流や海の活動が楽しかった様子が伺えた。（4(3)に提示）
- 不登校傾向の児童生徒にとって親もとを離れ、3日間の活動に参加すること自体が大きな一歩であったと考える。
- 参加を希望した児童の中で、3日間の活動に不安を抱えていたため、「ほっと東海」の担当教育相談員、指導主事、保護者、本人と事前に個別の面談を実

施した。しおりを基に丁寧に活動の流れを説明したり、約束ごとを確認したりした。保護者が同行を希望していたため、児童本人が安心して活動に参加できるように、様々な場面で協力を得ることができた。

6 課 題

- 今年度、「青空教室」に参加申し込みをした児童生徒数は、昨年度より10名ほど増加した。また、「ほっと東海」に入級していない児童生徒2名の参加があった。今後も、ほっと東海への通級者に限らず、不登校傾向の児童生徒とその保護者に、青空教室の目的、実施内容及び参加者の声を広く届けられるよう各校および教育委員会からの案内の工夫が課題である。
- 大学生ボランティアを確保していくために、星城大学、日本福祉大学、大同大学、至学館大学に継続して募集を行っていく必要がある。さらに、事前に大学に伺い、「青空教室」の目的等を大学生に直接説明することが効果的であると考えている。
- 事前に実施する説明会と交流会を研修センターの研修室1で行っているが、参加児童生徒が増えているため会場が狭くなっている。特に、交流会ではレクリエーションを行うため、今よりも広い会場に変更する必要があると考える。
- 参加した児童生徒の中には、「ほっと東海」に入級しているが、学校に登校することができているため、教育相談員等が児童生徒の様子や特性をしっかりと把握することができていなかった。そのため、そのような児童生徒が参加を希望した場合は、学校と「ほっと東海」が連携を図り、事前に児童生徒の情報交換を行う必要がある。